



社会貢献イベント 朗読会「ことばの力を楽しむ会」広島公演を開催しました

伊藤忠エネクス株式会社（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：岡田賢二）は、9月28日、社会貢献イベントである朗読会「ことばの力を楽しむ会」をグランドホール（広島県広島市）において開催いたしました。（主催：伊藤忠エネクス株式会社 後援：広島市、広島市教育委員会、広島県教育委員会、公益財団法人広島市文化財団、公益財団法人ひろしま文化振興財団）

「ことばの力を楽しむ会」は東日本大震災の被災地の方々の生きる力を応援することを目的に2014年から開始しました。震災を忘れないという思いと、あらゆる世代のことばの感性を育てたいという願いとともに全国で継続して開催しています（当開催で10回目。2013年度：青森県八戸市、2014年度：宮城県仙台市、2015年度：東京都中央区、2016年度：石川県金沢市と東京都中央区、2017年度：福岡県福岡市と東京都千代田区、2018年度：北海道札幌市、東京都中央区、2019年度広島市）。今回は273名のお客様にご観覧頂きました。

今回のテーマは「語りつぎたいものがたり」。出演は第1回目からご出演の山根基世さん、第2回目からご出演の進藤晶子さんの朗読をはじめ、今年1月のことばの力を楽しむ会にもご出演したアメリカ人 アーサー・ピナードさん（詩人・広島県在住）をゲストとしてお招きし、アーサーさんにはご自身の短編作と最新作の紙芝居を披露していただきました。原爆のお話、親子の絆のお話など、全部で6つの作品を朗読。あわせてクラリネット、アコーディオン、タンバリンの演奏でこころをつなぐ読み語りを演出いたしました。

※ 開催概要（朗読作品、出演者プロフィール等）につきましては、別紙のプログラムをご参照ください。

会場では被災者支援のための任意募金へのご協力を呼び掛け、73,445円が集まりました。この募金は後日すべて「東日本大震災ふくしま子ども寄附金（福島県）」、「西日本集中豪雨被災者支援（NPO法人ジャパンプラットフォーム）」、「台風15号被災者支援（NPO法人ジャパンプラットフォーム）」に按分し寄附させていただきます。ご協力いただいた皆様どうも有り難うございました。

当社は今後も「ことばの力を楽しむ会」等の社会貢献イベントを通じて、活力ある未来を築く次世代に豊かな心を育くみ、地域の創生に貢献してまいります。

「ことばの力を楽しむ会」次回は2020年1月25日（土）王子ホールでの開催を予定しています。観覧者募集のご案内は詳細決定次第当社ホームページに掲載させていただきます。



第 10 回目となることばの力を楽しむ会



山根基世さん朗読 2 作品「狐」

「あたし、うそついちゃった」



進藤晶子さん朗読 2 作品「なきすぎてはいけない」

「ピロードのうさぎ」



アーサー・ピナードさんが 7 年かけて制作した

紙芝居「ちっちゃいこえ」 絵は「原爆の図」

物から見た原爆を静かに描く自著の短編集「さがし
ています」も朗読



(左) 山根元世さん (中) アーサー・ピナードさん
(右) 進藤晶子さん



音楽：タンバリン 田島 隆さん、
アコーディオン 原田 忠さん
クラリネット 瀬戸 信行さん



満席となりました



復興支援の募金へのご協力ありがとうございました

【本件に関するお問い合わせ先】

伊藤忠エネクス株式会社 社会貢献・総務課 TEL 03-4233-8015

プログラム 開場13:00/開演13:30

第1部 45分 (13:30~14:15)

山根基世
「あたし、うそついちゃった」

進藤晶子「なきすぎてはいけない」

アーサー・ピナード「おはよう おは
よう おはようございます」ほか

(休憩15分)

第2部 60分 (14:30~15:30)

アーサー・ピナード
「ちっちゃいこえ」

進藤晶子「ピロードのうさぎ」

山根基世「狐」

終演 15:30 (予定)

朗読作品紹介

「あたし、うそついちゃった」

(作:ローラ・ランキン 訳:せな あいち 出版社:評論社)

少女ルースは、ある日、学校の校庭で小さなカメラを見つけます。大喜びで写真を撮って遊びますが、それはクラスメートのものだと分かりました。しかし、気に入ったあまり思わず「カメラは自分のもの」とうそをついてしまいます。後悔したものの本当のことが言い出せず、心苦しくなっていくルース。果たして…

「なきすぎてはいけない」

(作:内田 麟太郎 絵:たかす かすみ 出版社:岩崎書店)

祖父から孫へ、別れと、命のつながりを伝える、こころのメッセージ。誰も避けられない死の別離。しかし同時に、命は縄々と受け受け継がれていくものであることを、あたたかい絵と、やさしく語りかける言葉で綴ります。

「おはよう おはよう おはようございます」ほか『さがしています』より

(作:アーサー・ピナード 写真:岡倉禎志 出版社:童心社)

「おはよう」「いただきます」「あそび」…そんなありふれた言葉が交わされたかけがえない暮らしが、原爆によって、一瞬で失われた。その一部始終を見つめていたものたちが、写真を通して、私たちに静かに語りかけます。

「ちっちゃいこえ」

(脚本:アーサー・ピナード 絵:丸木 俊・丸木 位里「原爆の図」より 出版社:童心社)

詩人アーサー・ピナードが、丸木 俊・丸木 位里 夫妻の描いた「原爆の図」から着想し制作した紙芝居。「原爆の図」に描かれた生きものの絵を、選び、切りとり、反転させ、色を変えながら再構成。さらに、脚本を書き足しては朗読し、また書きなおし…と、7年をかけた仕上げた物語です。

「ピロードのうさぎ」

(作:マージェリ・W・ピアンコ 絵:酒井 駒子 出版社:プロンズ新社)

クリスマスプレゼントとしてやって来た、ピロードのうさぎのぬいぐるみ。男の子と遊んだり、毎晩寝たり、汚れまみれになりながら幸せな日々を過ごします。しかしある日、病気になる男の子を心配した大人たちが、衛生的によくないからと捨ててしまいます。突然、焼かれる運命となったピロードのうさぎ。しかしその時、奇跡が起こります。

「狐」

(作:新美 南吉 絵:長野 ヒデ子 出版社:偕成社)

夜祭りに半里の道を歩く子どもたち。一人の下駄の大きさが合わず下駄屋に寄ると、客の老女に「晩に新しい下駄を下ろすと狐がつく」と言われます。迷信だとやり過ごしますが、祭りが終わった帰り道、皆があの下駄屋の言葉を思い出します。ぎくしゃくした雰囲気の中、自分に狐がついたかもしれないと不安になった男の子。もし本当にきつねになっちゃったらどうなる?とお母さんに今日あったことを打ち明けるのでした。すると…

2019年
9月28日(土)
13:30~15:30 (開場13:00)
ゲバントホール

主催: 伊藤忠エネクス株式会社

後援: 広島市 広島市教育委員会 広島県教育委員会 公益財団法人広島市文化財団 公益財団法人ひろしま文化振興財団

朗読と音楽の会

語りつぎたいものがたり

ことばの力を
楽しむための
楽しまい
@Hiroshima

出演者



山根基世
(元NHKアナウンサー)

1948年、山口県生まれ。71年、早稲田大学文学部卒。同年、NHK入局。報道、美術、旅番組など多数の番組、NHKスペシャル「人体」「映像の世紀」等、大型シリーズのナレーションを担当。2005年、女性として初のアナウンス室長。07年、NHK退職。00年、放送文化基金賞受賞。15年度より、公益社団法人文字・活字文化推進機構にて「山根基世の朗読指導者養成講座」開講。「山根基世の朗読読本」「こころの声を「聴く力」」他、著書多数。FM TOKYO「感じて、漢字の世界」毎週土曜日JFN全国38局ネットで放送中。TBS日曜劇場「半沢直樹」ナレーション担当。



アーサー・ピナード
(詩人)

1967年、アメリカ・ミシガン州生まれ。ニューヨーク州のコルゲート大学で英文学を学び、卒業と同時に来日、日本語での詩作を始める。第一詩集『釣り上げては』で中原中也賞、「日本語ぼこりぼこり」で講談社エッセイ賞、「ここが家だーベン・シャーン」の第五福竜丸」で日本絵本賞、「左右の安全」で山本健吉文学賞、『さがしています』で講談社出版文化賞絵本賞を受賞。また、2017年には早稲田大学坪内逍遙大賞奨励賞を受賞。エッセイ集に「アーサーの言葉の食堂」、絵本に「ドームがたり」、翻訳絵本に「なすずこ」のつ??ほか多数。文化放送「アーサー・ピナード 午後の三枚おろし」にも出演。



進藤晶子
(元TBSアナウンサー)

1994年TBS入社。「筑紫哲也News23」「ニュースの森」などを担当する。2001年3月TBS退社。1年弱のニューヨーク滞在中を経てフリーとなる。その後、司会、執筆、朗読の他、各界のトップランナー数百人に取材するなどインタビュアーとしても活躍。10年3月慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科・修士課程修了。15年3月山根基世の朗読指導者養成講座(主催:文字・活字文化推進機構)第一期修了。以降、同講座でアシスタント講師を務める。16年オーチャードホールにて「映像の世紀コンサート」ナレーションを担当。18年セントリーホールで朗読コンサートを初プロデュースする。



瀬戸信行
(クラリネット)

1974年、広島県福山市生まれ。1995年より大阪の「ちんどん通信社」でクラリネットを独習し、1999年に楽隊「フレイルフ・ジャンボリー」を結成。全国各地で演奏する。海外のミュージシャンとの共演も重ね、2007年頃よりソロ活動を展開。楽曲提供のほか、演劇、影絵、アート・アニメーションとのコラボレーションも行う。2014年より尾道市に拠点を移し、現在も様々な音楽家と共演、「ジャンル無用のよろずクラリネット吹き」として活動する。



原田 忠
(アコーディオン)

1979年生まれ、広島市出身。在。14歳から作曲のため楽理を独習、19歳でアコーディオンを弾き始め。自身のユニットやサポート、録音等の経験を経て2013年、ソロアルバム「terraceにて」をリリース。ヨーロッパや南米の音楽を中心に様々なグループとセッション、録音、作曲などで活動している。



田島 隆
(タンバリン)

幼少より鍵盤楽器、管楽器、弦楽器、打楽器を習得。なかでもタンバリンの魅力に惹かれ、独自の奏法を生み出す。タンブレッコ(イタリア)、カンジューラ(インド)、レク(エジプト)、など世界のタンバリンを演奏する一方、オリジナルの楽器製作に取り組み、ギターとタンバリンが合体した「ギタンバリン」、ドラムセットの音色でリズムやメロディを奏でる「タジバリン」などを開発。「日本で唯一のタンバリン専門の演奏家」として各地で精力的に活動している。

次世代育成と地域への貢献 こころをつなぐ 読み語り

「ことばの力を楽しむ会」では毎回、ことばの表現者と音楽アーティストたちをゲストにお招きしています。

2014年
八戸

森のおとぎ会



八戸で90年以上続いている朗読会「森のおとぎ会」。大正時代に起きた大火からの復興で大人は子どもの相手をしてやれなかったが、これではいけないと、寺の境内で朗読会を開くようになった。この「森のおとぎ会」に通う小学生が、八戸で代々語り継がれる昔コ(昔話)を、南部の方言で披露しました。

図書館で毎週、絵本の読み語りをしている「やまがっこう」代表の齋藤信好さん。文字が「る」以外ほとんど出てこない「るるるるる」、「ん」以外はまったく出てこない「んんんんん」を、表現豊かに読み会場を沸かせました。

読み語り塾「やまがっこう」



2014年
仙台

2016年
東京

東京に避難している福島県の方々に思いを込め、代表作である詩「決意」や「木にたすねよ」を朗読。さらに東北の鎮魂と再生を祈る創作神楽のパフォーマンスを演じました。

詩人 和合亮一さん



語り部 紺野雅子さん



子どもたちから「雅子ババ」と慕われる福島県二本松市の語り部、紺野雅子さん。100人以上のお年寄りから口述で伝え聞いた昔話を、東京に避難している子どもたちに思いを込めて語りました。

石川県で絵本の朗読や人形劇に取り組む「にんぎょうげきやさん」こと鳥毛こすえさん。幻想的な影絵を、地元の子どもの詩の朗読、音楽家の演奏とともに披露しました。

にんぎょうげきやさん



2016年
金沢



2019年1月の東京公演では、広島市在住の詩人アーサー・ビナードさんが、中原中也賞を受賞した『釣り上げては』などの作品を朗読。母国語ではなく日本語だったからこそ父の死を表現できたことなど、創作のエピソードが語られました。

2019年
東京



詩人 アーサー・ビナードさん

小説・エッセイの朗読会では音楽家・飯田俊明さん作曲によるオリジナル楽曲が、様々な作品の世界を彩っています。



ピアノ 飯田俊明さん チェロ 富田千晴さん ヴァイオリン 高木 弾さん

2017年
東京

元NHKアナウンサー 松平定知さん



2017年からは、小説やエッセイの「ことばの力を楽しむ会」もスタートしました。初回はゲストに元NHKアナウンサーの松平定知さんをお迎えし、藤沢周平の代表作「鮮しぐれ」を朗読頂きました。

絵本作家よしながごうたくさんをゲストに迎え、ライブペインティングのワークショップを実施。頭に載せているのは、ごうたくさんの「相棒」、自作の被りものです。大迫力の朗読「給食番長」に子どもたちは大盛り上がりでした。音楽で楽しませてくれたのはギタリストpepe伊藤さんの演奏です。ナレーター野口ジュンさんと一緒に奏で、字のない絵本「ぞうのボタン」のユニークな「音楽朗読」に、笑いが絶えない朗読会となりました。

絵本作家 よしながごうたくさん



2017年
福岡

2018年
東京

ジャズサクソフ奏者 坂田明さん



当代随一のジャズサクソフ奏者、坂田明さんをゲストに迎えた2018年の東京公演。朗読をするのは初めてという坂田さんの素朴で味わい深い声、そして、山根基世さんの朗読とサクソフの競演「赤とんぼ」での静かで激しい即興演奏が心の奥深くに届く朗読会となりました。

歌手 酒井美直さん



2018年
札幌

開催直前に北海道胆振東部地震が発生し、こんな時こそ「ことばの力」を!と開催した札幌公演に多くのお客様にお集まり頂きました。ゲストに迎えたのはアイヌルーツを持つ歌手の酒井美直さん。朗読ではアイヌ神謡を披露、山根基世さんとのトークでは、アイヌ文化や踊りを紹介。伝統を大切にしながらも、ルーツにとらわれず一人の人として生きることの大切さを語りました。